

「現代文学」への転進と帰朝時点からの再出発 家庭小説としての『道草』と対位法的叙法の試み

柴田 庄一

はじめに

1900年(明治33年)9月、時あたかもパリ万国博の年に西遊し、二年間に亘るロンドン留学を体験した夏目金之助漱石は、帰朝するや東京・千駄木に居を構え、東京帝国大学文科大学講師として懸案の「文学論」を講じる一方、『吾輩は猫である』(明治38年)を皮切りに、長らく念願としていた創作活動にも邁進することとなる。その充実した文業は、1)様々な素材と多彩な文体を縦横に駆使し、囁目の日常事象に取材するとともに、強靱な想像力をも存分に羽ばたかせた初期作品、2)朝日新聞の文芸記者に転身(明治40年)してからの、文明批評家としての個性を前面に打ち出し、「皮相上滑りの開化」(近代化)がもたらす光と影を、極限にまで問い詰めようと図った中・後期の代表的作品群、そして、3)『硝子戸の中』(大正4年)をはさんで『道草』(大正4年)から『明暗』(大正5年)にまで至る、最後期の小説作品とに大別できると考えていい。とりわけ1)から2)への目覚しい展開は、近代人特有の「個我意識」の実相を鋭く抉り出すと同時に、その心性を徹底的に掘り下げようと図った点で、近代日本文学の稀有な高峰ともいふべき達成を示している。とはいえ、それは、自意識の無間地獄とその行き着く果ての袋小路の描出に帰結せざるを得ないものでもあって、とりわけ漱石文学を代表する二組の「三部作」は、みずみずしい青春小説の代表作ともいえる『三四郎』(明治41年)を唯一の例外として、ほぼおしなべてメランコリーと苦悶に色濃く縁取られた小説群として屹立している。たとえば『門』(明治43年)の宗助は禅・仏教に救い(安心立命)を求めて得られないし、『行人』(大正2年)の一郎は狂気すれすれの臨界にまで追い詰められ、『ころ』(大正3年)の先生は、つまるところ自裁することを余儀なくされる。漱石自身もまた、これらの作品の執筆途上、持病の胃潰瘍を極端

に悪化させたばかりか、自ら閑適を得るべく、その対極にあると目された漢詩や書画の世界に、しばし逍遥する息抜きのひと時を求めないではいられなかった¹⁾。そうした事情をも併せて勘案してみるなら、最後期の漱石には、日本においてもすでにそろそろ完成の域に達せんとしていた「近代文学」の行き詰まりを見極め、その隘路をどうにかして打開していききたいとする、切なる願いが募っていたとしても、何ら異とするには当たらない²⁾。その一例とでもいうべきか、『行人』においては、唐の禅僧・香巖の逸話を手掛かりに、主客合一の究極境に達せんとする「絶対即相対になる」事態の要諦が探索されている。とはいえ、そのような「転回」の諸相については、いまだその追求が至って手薄であると言わざるをえないのが漱石研究の現状である。ここでは、一般に「修善寺の大患」(明治43年)と呼称される大病を契機として成立したエッセイ集『思い出す事など』(明治43年)や、その後の心境を綴った『硝子戸の中』を参照しつつ、最晩年様式の開始を告げる『道草』(大正4年)の構造分析を通して、狭義の「近代文学」を乗り越えるべく、漱石自身が新たに切り拓こうとした叙法の特徴についても検討してみたい。

大患後の病臥と束の間の閑適 「30分間の死」と『思い出す事など』

明治43年6月、前期三部作の最終作『門』を脱稿して間もなく、極度の体調不良を訴えた漱石は、胃潰瘍の診断を受け、いったんは内幸町の長与病院に入院するが、やがて転地療養の目的ではるばる伊豆の修善寺へと赴くことになる。ところが、温泉宿に投宿するや、たちまちにして病状悪化、800グラムにもものぼる大量吐血に見舞われ「30分間の死」を経験するに至る。いや、この場合、「経験する」というのはあるいは当たっていないかも知れない。図らずも人事不省に陥った漱石は、幽明の境をさまよう「いまわの際」を、まるで覚えてはいないというのだからである。とはいえ、この時の大患は、自ら身をもって体験したものであっただけに、その前後の心境が、切なる実感を伴った表現として残されることになった。たとえば、「大患日記」の9月21日の項には、「嬉しい。生を九切に失って命を一簣につなぎ得たるは嬉しい」と率直な感想を記した上で、「生き返るわれ嬉しさよ菊の秋」(平岡敏夫編『漱石日記』、岩波文庫、168)との一句をも得ている³⁾。こうして、生涯最大の危機を脱し、ようやく閑適を得た漱石が、懇切な見舞客や看護の心配を忝うした人たちへの感謝と返礼の意味を込めて認めめたのが、随筆集『思い出す事など』であった。

およそ半年間に亘った病氣療養は、もとより様々な感慨を催す機縁となったが、最大の衝撃をもって受けとめられたのは、人間は、たとえ自我に秀でた近代人であるとしても、何もかもすべてを意識的にコントロールできるわけではないとする認識であった。吐血後の「空白」を思い出しあぐねて、漱石は、このように書いている。「かく多量の血を一度に吐いた余は、その暮方の光景から、日のない真夜中を通して、^{あく}明る日の天明に至る有様を巨細残らず記憶している気であった。ほど^へ経て妻の心^{こころおぼえ}覚に付けた日記を読んで見て、その中に、ノウヒンケツ（^{ろうばい}狼狽した妻は脳貧血をかくの如く書いている）を起し人事不省に陥るとあるのに気が付いた時、余は妻を^{まくらべ}枕辺に呼んで、当時の模様を委しく聞く事が出来た。徹頭徹尾明瞭な意識を有して注射を受けたとのみ考えていた余は、実に三十分の長い間死んでいたのであった」（『思い出す事など 他七篇』岩波文庫、48-49）。してみれば、「三十分の長い間」の昏睡状態は、あくまでも聞き書きとして、たとえば次のように書き記される他ないものであった。「余はその時さっと^{ほとばし}迸る^{ちしお}血潮を、驚ろいて余に寄り添おうとした妻の^{ゆかた}浴衣に、べっとり吐き続けたそうである。雪鳥君は声を顫わしながら、奥さん確かりしなくては^い不可^げませんといったそうである。社へ電報を懸けるのに、手が^{わなな}戦いて字が書けなかったそうである。医師は追っ懸け追っ懸け注射を試みたそうである」云々（49）。

このように、まるで「^{こうや}曠野に捨てられた^{あかご}赤子の如く」（59）身動き一つだに思うに任せずただただじっと横たわっているしかない状態は、当然のことながら、自己存在の無力さをあらためて感得させるものであったに違いない。とはいっても、同時に見落としてならないのは、そのことがむしろ奇貨になったとでもいうべきか、「茫然として自失せざるを得なかった」（54）窮状は、常住坐臥「^{ことごと}悉く敵」（67）に囲まれた戦場裡にあると自覚していた漱石に、しばしの休息と思わぬ平安をもたらすものでもあったという点である⁴⁾。「血を吐いた余は土俵の上に^{たお}仆れた相撲と同じ事であった。自活のために戦う勇氣は無論、戦わねば死ぬという意識さえ持たなかった。余はただ仰向けに寝て、^{あおむ}纔な呼吸を^{わづか}敢てしながら、^い怖い世間を遠くに見た。病氣が床の^{とこ}周囲を^{くるり}屏風のように取り巻いて、寒い心を暖かにした」（67-68）。その結果、「『^{あんしん}安心して療養せよ』という電報が^{まんしゅう}満州から、血を吐いた翌日に来た。思いがけない知己や朋友が代る代る^{まくらもと}枕元に来た。あるものは鹿児島から来た。あるものは山形から来た。またあるものは眼の前に^{せま}逼る結婚を延期して来た。余はこれらの人に、どうして来たと

聞いた。彼らは皆新聞で余の病気を知って来たといった。仰向に寝た余は、天井を見詰めながら、世の人は皆自分より親切なものだと思った。住みにくいとのみ観じた世界に^{たちま}忽ち暖かな風が吹いた」(68)のだという⁵⁾。かくして、漱石は、あれこれと世話を焼いてくれた人たちの厚情を導きの糸として、新たに兆した感懐を次のように記すのである。「四十を越した男、自然に^{とうた}淘汰せられんとした男、さしたる過去を持たぬ男に、忙しい世が、これほどの手間と時間と親切を掛けてくれようとは夢にも^{まちも}待設けなかった余は、病に^{やまい}生き還ると共に、心に^{かえ}生き還った。余は病に謝した。また余のためにこれほどの手間と時間と親切とを惜まざる人々に謝した。そうして願わくは善良な人間になりたいと考えた。そうしてこの幸福な考えをわれに^{うちこわ}打壊す者を、永久の敵とすべく心に誓った」(68-69)。ここには、面白いことに、^{けんかい}狷介な一面を有していたと思しい^{おぼ}漱石には珍しく、真率な心の内が吐露されており、いわば決意表明の口調ともども、明らかな「転回」の予兆を読み取ることができよう。

今ひとつの「空白」と死生観の転回 『道草』への助走としての『硝子戸の中』

「30分の長い間」の死という「空白」とその前後の心境をめぐって執筆されたのが『思い出す事など』であったとすると、今ひとつの「空白」に関連して展開されるのが『硝子戸の中』である。では、その「空白」とはいったい何なのか。そのことを検討するためには、何よりもまず真っ先に、漱石の思いの行き着く先を見届けておかななくてはならない。

大病の予後を養い、書齋に閉じ籠もることの多くなった漱石は、勢い、「硝子戸の中」に^{きよくせき}躊躇しつつ、こころに浮かぶよしなし事を、とつおいつ想起してみるしかない日々を送る。病臥のつれづれに、来し方行く末を思い描いてみると、作家の筆は、おのずから過去に向かい、その先にはまた幼少年期のできごとがあれこれと脳裏に蘇えてくる。その際、視覚や聴覚といった、ごくごく身近で些細な感覚表象が呼び水となっている点はまことにもって興味深いことというべきかも知れない。たとえば、「どんな田舎へ行ってもありがちな豆腐屋は無論あった。その豆腐屋には油の臭の染み込んだ^{なわのれん}縄暖簾がかかっている^{かどぐち}門口を流れる下水の水が京都へでも行ったように^{きれい}綺麗だった。その豆腐屋について曲ると半町程先に^{せいがんじ}西閑寺という寺の門が小高く見えた。赤く塗られた門の後は、深い^{たけやぶ}竹藪で一面に^{おお}掩われているので、中にどんなものがあるか通りからは全く見えなかったが、その奥でする朝晩の^{おつとめ}御勤の^{かね}鉦の音は、今でも私の耳に残って

いる。ことに霧の多い秋から木枯の吹く冬へ掛けて、カンカンと鳴る西閑寺の鉦の音は、何時でも私の心に悲しくて冷たい或物を叩き込むように小さい私の気分を寒くした」(57)。

「赤く塗られた門」や、「カンカンと鳴る西閑寺の鉦の音」に導かれるようにして、漱石は、すぐこの件くだりに続けてこうも書いている。「この豆腐屋ゆめうつの隣よせに寄席ひとよせが一軒あったのを、私は夢幻のようにまだ覚えている。こんな場末ひとよせに人寄場ひとよせのあろう筈はずがないというのが、私の記憶かすみに霞かすみを掛ける所せ為いだろう、私はそれを思い出すたびに、奇異な感じに打たれながら、不思議そうな眼を見張って、遠い私の過去を振り返るのが常である」(58)。

このようにして、さまざまな過去の思い出が想起される。それは、たとえば懐かしい母の面影や兄姉のことであり、また「美しい人」大塚楠緒くすおの姿であったりもするのだが、とはいえ、どんなに思いを凝らそうと、どうしても思い描くことのできない記憶の「空白」が、厳然として存在してもいたのであった。探照燈の光が、漱石自身の来歴に向けられたとき、そこには、実は、自己の生い立ちにまつわるもうひとつの秘め事が口を空けていたのだ。すなわち彼は、両親が高齢になってからの末っ子であったため、世間体を憚って里子に出され、また故あって養子にも遣られるという数奇ゆくたてな経緯が秘匿されていたのである。そして、長らく「本当の両親を爺婆じいばとのみ思い込んで」(85)いた漱石に、その「空白」の事実を開いて見せてくれたのが、他ならぬ下女の親切であった。彼女は、「誰にも話しちゃ不可いけませんよ。よござんすか」(86)と念を押した上で、「貴君あなたが御爺さん御婆さんだと思っていらっしゃる方は、本当はあなたの御父おとっさんと御母さんなのですよ」(86)と囁いてくれたのだという。「私はその時ただ『誰にも云わないよ』と云ったぎりだったが、心うちの中では大変うれ嬉しかった。そうしてその嬉しさは事実を教えてくれたからの嬉しさではなくって、単に下女が私に親切だったからの嬉しさであった」(86)。

ここでは、久しく認識し得なかった己れ自身の裏面にあったもの、言い換えれば、潜在的な自己への真率な向かい合いとでもいうべきものが、いわば正面から引き受けられようとしているように思われる。それはまた、「敬愛に価する長者として認め」(26)ていた高等学校の旧友に対する、思わぬ応対にもよく表われていると言うべきかも知れない。「去年上京した序ついでに久し振で私を訪ねてくれた時、取次のものから名刺を受取った私は、すぐその足で座敷へ行って、いつもの通り客より先に席に着いていた。すると廊下づたい伝へやに室の入口まで来た彼

は、座布団の上にきちんと座っている私の姿を見るや否や、『いやに澄ましているな』と云った。(改行) その時向の言葉が終るか終らないうちに『うん』という返事が何時か私の口を滑って出てしまった。どうして私の悪口を自分で肯定するようなこの挨拶が、それ程自然に、それ程雑作なく、それ程拘泥こだわずに、するすると私の咽喉のどを滑り越したものだろうか。私はその時透明な好い心持がした」(28)。

おのれ自身への悪口をもあっさり自然に受け容れて、なお「透明な好い心持がした」と書き記す漱石に、大患後の心事を重ね合わせてみるとしても、さほど不自然なことではないであろう⁶⁾。そして、おそらくはそうした変化のなかで、もうひとつ注目されるのが、漱石の死生観に新たな転回が加わったと目される点である。『硝子戸の中』の記述によれば、自宅の漱石に何度も面会を乞うた女が、自らの「悲しい身の上話」(19)を語った末、このまま生きることを選ぶべきか、それとも死ぬ方がいいのかを問い質したことがあったのだという。その理由とされるのが、「私は今持っているこの美しい心持が、時間というものの為に段々薄れて行くのが怖くって堪らないのです。この記憶が消えてしまって、ただ漫然と魂の抜殻のように生きている未来を想像すると、それが苦痛で苦痛で恐ろしくって堪らないのです」(21)というものであった。その際、女を送って出た漱石は、帰り際の有様をこのように伝えている。「次の曲り角へ来たとき女は『先生に送って頂くのは光荣で御座います』と云った。私は『本当に光荣と意思まじめますか』と真面目に尋ねた。女は簡単に『意思まじめます』とはっきり答えた。私は『そんなら死なずに生きていらっしやい』と云った。私は女がこの言葉をどう解釈したか知らない。私はそれから一丁ばかり行って、又宅うちの方へ引き返したのである」(22)。

悩みに悩んだ末、自死することまで思いつめた女に対し、「そんなら死なずに生きていらっしやい」と諭したとき、漱石自身もまた、おそらくは自らの死生観に余儀ない変更を強いられたものと思われる。それというのも、彼は、常々こう考えていたというのだからである。「不愉快に充ちた人生をとぼとぼ辿りつつある私は、自分の何時か一度到着しなければならぬ死という境地に就いて常に考えている。そうしてその死というものを生よりは楽なものだとばかり信じている。ある時はそれを人間として達し得る最上至高の状態だと思ふ事もある。『死は生よりも尊たつとい』(改行) こういう言葉が近頃では絶えず私の胸を去来するようになった」(23)。ところが、そのような漱石が、生死の境に呻吟す

る女に「真面目に」相對したとき、やはり死を勧めることはできなかった。自ら生を育みつつ、なお他への助言を求められれば、たとえ内心では自己撞着を感じつつも、何としても生き延びることを選び取るよう諭さないわけにはいかなかったからである。「だから私の他に与える助言はどうしてもこの生の許す範囲内に於てしなければ済まない様に思う。どういう風に生きて行くかという狭い区域のなかでばかり、私は人類の一人として他の人類の一人に向わなければならないと思う。既に生の中に活動する自分を認め、又その生の中に呼吸する他人を認める以上は、互の根本義は如何に苦しくても如何に醜くてもこの生の上に置かれたものと解釈するのが当たり前であるから」(24)。「斯くして常に生よりも死を尊いと信じている私の希望と助言は、遂にこの不愉快に充ちた生というものを超越する事が出来なかった」(25)と結論されるのである。ここには、あるいは、一見論理矛盾に逢着せざるを得なかった漱石自身の戸惑いが見え隠れしているとも言えるかも知れない。しかしながら、その背後には、大病から生還して嬉しいと感じた自らの実感と、「如何に苦しくても如何に醜くてもこの生」を生き通さねば済まないとする生への志向が、ともどもに反響していたと見ることが可能なのではあるまいか。

この場合、後の作品との関連で特に注目されるのは、次の二点であろうと思われる。まずひとつは、女からの相談を受けるに際し、こうした注文を付けている点である。「御互に体裁の好い事ばかり云い合っていては、何時まで経たって、啓発される筈も、利益を受ける訳もないのです。貴方は思い切って正直にならなければ駄目ですよ。自分さえ充分に開放して見せれば、今貴方が何処に立って何方を向いているかという實際が、私に能く見えて来るのです。そうした時、私は始めて貴方を指導する資格を、貴方から与えられたものと自覚しても宜しいのです。だから私が何か云ったら、腹に答えべき或物を持っている以上、決して黙ってはいけません。こんな事を云ったら笑われはしまいか、恥を掻きはしまいか、又は失礼だといって怒られはしまいかなどと遠慮して、相手に自分という正体を黒く塗り潰した所ばかり示す工夫をするならば、私がいくら貴方に利益を与えようと焦慮ても、私の射る矢は悉く空矢になってしまうだけです」(32-33)。

かく言うごとく、相手にあらいざらい告白することを求めるとすれば、そのことと引き換えに、相見える者同士の相互性として、自らもまた自己の「正体」に真摯に向き合うことを免れるというわけにはゆくまい。それゆえに、漱石は、

またこうも付け加えることを忘れてはいないのである。「これは私の貴方に対する注文ですが、その代り私の方でもこの私というものを隠しは致しません。有のままを曝^{さら}け出すより外に、あなたを教える途^{みち}はないのです」(33)。ここからは、本人の自己認識はともかくとして、意外にも実直で真率な、教育者の素養が漱石に具わっていた様子が窺われよう。

だが、同時にもうひとつ注目しておかなければならないのは、そうした意志が、どうやら新たな創作世界を切り拓こうとする、作家の志向ともはっきり連動していると考えられる点である。たとえば、女と別れた直後の心境はこのように綴られている。「むせっぽいような苦しい話を聞かされた私は、その夜却^{かえ}って人間らしい好い心持を久し振に経験した。そうしてそれが尊^{たつ}とい文芸上の作物^{さくぶつ}を読んだあとの気分と同じものだという事に気が付いた(23)。「苦しい話」から「人間らしい好い心持」を感じ取れる心性には、先にも触れた、ほとんど「朗^{ほが}らかな」とさえ呼んで差し支えない「透明な」自己批評にも通じるものが仄見えている。そして、それはまた、倫理観と責任感の表明として、作家自身の過去の来歴を徹底した吟味と解析の俎上に載せるよう心に期した証左であるとも言えるだろう。たとえそれが、いかに苦く悲痛に満ちたものであろうとも、それこそが生の実相であるとするなら、そのことを一切合財勇気をもって描き尽くすことの覚悟を固めているのだと言い換えてもよい。かくして、エッセイ集『硝子戸の中』が導く結論のひとつは、次のような思索に集約されていくのである。

「私は今まで他^{ひと}の事と私の事をごちゃごちゃに書いた。他^{ひと}の事を書くときには、なるべく相手の迷惑にならないようにとの掛念があった。私の身の上を語る時分には、却って比較的自由的な空気の中に呼吸する事が出来た。それでも私はまだ私に対して全く色気を取り除き得る程度に達していなかった。嘘^{うそ}を吐いて世間を欺^{げん}く程の銜^き気がないにしても、もっと卑しい所、もっと悪い所、もっと面目を失するような自分の欠点を、つい発表し^{はず}ずにしまった。聖オーガスチンの懺悔^{ざんげ}、ルソーの懺悔、オピウムイーターの懺悔、それをいくら辿って行っても、本当の事実は人間の力で叙述出来る筈^{はず}がないと誰かが云った事がある。況^まして私の書いたものは懺悔ではない。私の罪は、もしそれを罪と云い得るならば、顔^{すこ}ぶる明るい処からばかり写されていたろう。其所に或人は一種の不快を感じずるかも知れない。然し私自身は今その不快の上に跨^{また}がって、一般の人類をひろく見渡しながらかみ微笑しているのである。今までつまらない事を書

いた自分をも、同じ眼で見渡して、あたかもそれが他人であったかの感を抱きつつ、矢張り微笑しているのである」(115-116)。

「軽い風が時々鉢植の九花蘭の長い葉を動かしてきた。庭木の中で鶯が折々下手な囀りを聴かせた。毎日硝子戸の中に坐っていた私は、まだ冬だ冬だと思っているうちに、春はいつしか私の心を蕩揺し始めたのである。(改行)私の瞑想は何時まで坐っていても結晶しなかった。筆をとって書こうとすれば、書く種は無尽蔵にあるような心持もするし、あれにしようか、これにしようかと迷い出すと、もう何を書いてもつまらないのだという呑気な考も起ってきた。しばらく其所で佇ずんでいるうちに、今度は今まで書いた事が全く無意味のように思われ出した。何故あんなものを書いたのだろうかという矛盾が私を嘲弄し始めた。有難い事に私の神経は静まっていた。この嘲弄の上に乗ってふわふわと高い瞑想の領分に上って行くのが自分には大変な愉快になった。自分の馬鹿な性質を、雲の上から見下して笑いたくなかった私は、自分で自分を軽蔑する気分に揺られながら、揺籃の中で眠る小供に過ぎなかった」(114-115)。

おそらくはこのような瞑想の内から、「顔ぶる明るい処」ばかりではなく、「もっと卑しい所、もっと悪い所、もっと面目を失するような自分の欠点を」も描き尽くそうとの決意が固められていったのだと考えられる。そこで俎上に載せられるのは、単に幼ない頃の苦しい思い出だけではとどまらない。むしろ、いまだ物心のつかない幼少年期の無意識の経験にまで遡り、同時にまた、帰朝時点の生活にあらためて立ち戻ることで、両者が密接に連関する養父や自己の来歴との全面的な対決が目論まれていたのである。そして、その交点に浮かび上がってきたもの、それこそが『道草』の世界に他ならなかった。

「遠い所から帰って来た男」の来歴と自己解剖 『道草』における素材と主題

最後から二番目の小説にして、完結したものとしては最終作となる『道草』は、次のように書き出される。「健三が遠い所から帰って来て駒込の奥に所帯を持ったのは東京を出てから何年目になるだろう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋しみさを感じた。(改行)彼の身体には新らしく後に見捨てた遠い国の臭がまだ付着していた。彼はそれを忌んだ。一日も早くその臭を振り落さなければならぬと思った。そうしてその臭のうちに潜んでいる彼の誇りと満足には却って気が付かなかった」(『道草』、新潮文庫、5)。

ここにはすでに、作品の素材とテーマとでも呼ぶべきものが、ほぼ過不足な

く呈示されていると言っている。「遠い所から帰って来た男」とは、明らかに漱石自身をモデルにした作者の分身であり、それゆえに、『道草』は、まずは主人公の健三に寄り添うかたちで開始される。とはいえ、自身を素材にするとはいうものの、必ずしも自己の主張や心のうちを一方的に弁じ立てることに終始しているわけではない。たしかに、よくある小説の通弊として、自伝的要素を含み持った作品は、ともすれば、独善的なひとりよがりにも陥ることを避けがたい。そこで、そのことを回避するための方策として、いくつかの対照項が設定される（この点において、『道草』は、凡百の自伝小説や自然主義派の私小説とははっきりと区別される）。その第一に挙げられるのが、健三にのみ寄り添って終始するということではない、いわば世阿弥の「離見の見」にも通うような微妙な距離の設定であろう。そのような「即かず離れず」の眼差しは、作品の冒頭、当の主人公でさえ気付かない、もしくは意識もしていない深層心理の負の側面を照射して呵責ないが、同様の描写はまた、次のような場面にも見出されるところのものである。「娯楽の場所へも滅多に足を踏み込めない位忙しがっている彼が、ある時友達から謡の稽古を勧められて、体よくそれを断わったが、彼は心のうちで、他人にはどうしてそんな暇があるのだろうと驚ろいた。そうして自分の時間に対する態度が、恰も守銭奴のそれに似通っている事には、まるで気がつかなかった」（10）。

続いて考察に値するのは、もっとも身近な存在に他ならない妻御住やその周辺の人物群との関係である。とりわけ細君は、後に見る通り、生活観の相違や折り合いの悪さから、健三にとって、日常いくたの行き違いを甘受せざるをえない厄介な対者として全編を支配するが、さらに加えて、かつての養父であった島田が登場するに及んで、両者の経緯をも含めた健三自身の人間像を、容赦なく対象化する恰好の鏡が設えられたことになる。島田は、かつての誼を理由に、洋行帰りで羽振りのいい（筈の）健三からなにがしかの金銭を引き出そうとして出沒するが、近所の往来で出会った彼の第一印象が、とりもなおさず「帽子を被らない男」（7）とされるのは象徴的というべきであろう。なぜなら「黒い髭を生して山高帽を被った」（6）ハイカラ趣味の健三との違いがことさら際立たされることによって、主人公を徹底的な吟味と解析に掛けようとする相対化の視線が光っているのだからである。

その際、見逃せないのは、島田にとって健三が重要なのは、あくまで金づるとして頼りになるからであるのと同じように、妻にとってもまた、夫が自分に

好くしてくれるかどうかをもっとも大事だとされている点である。御住は、健三との対話のなかで、たとえば次のように述懐している。「『妾、どんな夫でも構いませんわ、ただ自分に好くして呉れさえすれば』 『泥棒でも構わないのかい』 『ええええ、泥棒だろうが、詐欺師だろうが何でも好いわ。ただ女房を大事にして呉れば、それで沢山なのよ。いくら偉い男だって、立派な人間だって、宅で不親切じゃ妾にや何にもならないんですもの』」(217)。

そもそも社会的存在としての人間は、何人であれなにがしか諸種の属性の集積体であることを免れない。ところがここでは、社会的地位や教育的キャリアといった後天的属性を一切剥ぎ取られ、いわば裸形となった基底的な生活者のレベルが問題とされている。仮にそうした地平に降り立ってみるならば、市井の民は、その違いを認めることなどほとんど不可能に近く、互いに相似た相貌を垣間見せるというにとどまろう。そうであれば、たとえそこに作者の自伝的要素が見え隠れしているとしても、それらをもはや私的な個別ケースとしてのみ捉えて済ませることはできない。この点に関しては、たとえば江藤淳が、その評伝『漱石とその時代 第五部』(新潮選書)のなかで、「particular case ㉔ general case ㉕ reduce スル」ことこそ、小説の尤も有意義な役目の一つであるとする漱石自身の断片を引いて、このように指摘している。「少くとも『道草』の『健三』に対しては、作者はいくらでも『暗い処』を浮き上らせるようにその光源を定めることができる。そして、そのことによってその『卑しさ』や『悪』を描くのみならず、彼を弁護しかつ傷つけた相手を糾弾することもできる。何故なら、定義上それは『particular』な自己暴露でもなければ、義理ある人々への意趣返しでもあり得ず、『人道』、つまり人間一般の『general case』についての認識と表現であるはずだからである」(240)。

いずれにせよ、『道草』の主人公が洋行帰りのインテリではあるにしても、叙述の対象とされるのはあくまで生活者の次元においてである⁷⁾。そのことは、もとより登場人物のだれかれを区別するはずのものではない。そして、外でもなくこの点こそが、ついに「高等遊民」として生きるわけにはいかない健三の自己批評的な叙述とも相俟って、周辺人物の存在が、いつにも増して大きく浮き彫りされる所以ともなっている。

「世知辛く」なった世の中と経済的困窮の諸相

ところで、健三の日常は、帰朝時の漱石の実生活を反映し、大学での講義と

答案の採点、それにノートの作成などを日々の生業なりわいとしている。その中には、当然のことながら、若い学生たちとの対応も含まれる。そして、両者の関係を、作者は、たとえば次のような場面に活写している。

「健三は時々宅うちへ話しに来る青年と対坐たいざして、晴々しい彼等の様子と自分の内面生活とを対照し始めるようになった。すると彼の眼めに映ずる青年は、みんな前ばかり見詰めて、愉快に先へ先へと歩いて行くように見えた。或日彼はその青年の一人に向ってこう云った。『君等は幸福だ。卒業したら何になろうとか、何をしようとか、そんな事ばかり考えているんだから』青年は苦笑した。そうして答えた。『それは貴方あなたがたの時代の事でしょう。今の青年はそれ程呑気のんきでもありません。何になろうとか、何をしようとか思わない事は無論なんないでしょうけれども、世の中が、そう自分の思い通りにならない事またも亦能く承知していますから』成程彼の卒業した時代に比べると、世間は十倍も世知辛せちがらくなっていた」(126)。

「十倍も世知辛く」なった世間に直撃されているのは、むろん若者たちばかりではない。それは、いわば世相ともいべきものとして社会の全体相を覆っており、したがって、ほとんどすべての世代の人たちが、何らかのかたちで経済的不如意をかこつ生活を強いられているからである。

さしずめ、その代表的人物が、「因業いんごうで強欲ごうよくな男」(146)とされる元養父の島田であるとしても、実のところ彼は、そうしたなかでのほんの一例というに過ぎない。島田の先妻、すなわち健三の養母にあたる御常もまたほどなく無心のために姿を現わすし、健三の兄や姉、相場で失敗し零落した義父といった、社会の第一線をすでに退いたか、もしくはその予備軍に属するような人たちも、唯一姉の夫の比田だけを例外として、ことごとく窮迫した生活へと追い立てられているのである。

その結果、健三の許へは、様々な金銭的支援の要請がしきりに持ち込まれることになる。彼はたとえば、頼りにされるまま姉に月々些少の小遣いを渡しているし、兄に対しても葬儀に参列するための袴を、また義父には外套をすら貸すよう求められたりもしているのだ。ところが、実は、そのような当の健三自身が、自ら物質的に「如何いかにも貧弱」(167)で「経済けいぎに余裕ゆとりのない」(161)ことを自覚しており、じじつ、月々のお金が余らないからといって、細君は、せっせと自分の着物や帯を質入れせざるを得ないような実情なのである(そのために、健三は、別の働き口を求めて収入を増やすことを余儀なくされている)。

このように、『道草』での漱石は、幾重もの困窮を抱えた市井の人々に照準を合わせ、ひたすら生活者レベルの実相を冷徹に見据えようとする。とはいえ、こうした人物群が配置されていることの効用は、もうひとつ別のところにあるとも考えてみるができる。果たせるかな、それは、身近な人間関係のもつれを通して、それぞれの人物相互の批判的な対象化を可能にするのである。もとより健三も、そうした批評を免れうるものではない。たとえば彼は、「人目には」「^{きちがいじ}気違染^{かんしゃくもち}みた癩癩持」(151)で、「親類から変人扱いに」(10)されているばかりか、姉にも「^{へんくつ}偏窟」(15)と映っているし、細君にいたっては、「親しみがたい無愛想な変人」(194)、「神経質」で「度胸のない」(170)「世の中と調和する事の出来ない^{へんくつ}偏窟な学者」(131)だと解釈している。また、元官僚の義父からすれば、健三はあまりに横着で無作法な、ただの世間知らずにしか見えていない⁸)。こうして、健三自身、「^{かえ}却って旧式」(199)な己れを意識したり、「親切気のある」姉に較べると「己の方が不人情に出来ているのかも知れない」(244)などと、殊勝な自己省察を口にしたりもするのである。そのように捉えてみれば、この作品の重要な特徴のひとつに、語りの視点の重層化による鋭利な人間観察と、文字通り多声的なことばが交響しあう、ポリフォニックな世界の構成を挙げることができよう。

「照らし照らされる」対人関係の描出と俯瞰する視点のかくとかく

『道草』の主人公健三の人間像が、徹底的に相対化されて描かれることについては、先述した。「相対化」とは、いうまでもなく、通常は自明と見なされるがゆえに、ともすれば遣り過ぎしてしまいかねないものごとを、あえて意識化することを意味している。とはいっても、さらに注意しておく必要があると思われるのは、健三が、単に自画像としてだけでなく、また、周辺人物との相互関係に照らして取り上げられるという叙述のしかたについてであろう。

なるほど、健三自身、自らを批判の俎上に載せることで、ポジティブな側面の自己相対化を図ってはいる。しかし、そうした主人公の自己吟味だけではどうやらまだ充分とは言えないようなのだ。そこで、執られる方法が、齟齬と葛藤の対象である身近な他者との対人関係のなかで、相克する相手の立場からする眼差しをも考慮しつつ、愛憎交々の実態を複眼的に捉えようと図ることである。その際、注目されるのは、絶えず作中人物の視線を交錯させながら、特定のだれかれにことさら肩入れするのではない、複合的描写が確保されるという

点であろう。いわば映画のカメラを交互に切り替えるようにして、「照らし照らされる」という相互の関係性を追跡することによって、無用な美化や抽象化を排し、対人関係の微妙な機微や多元的な生の実相を、立体的に浮き彫りすることが可能となるのである。

それにしても、作品中の各所に^{ちりば}鑲められた、それぞれの登場人物が自ら気付いていない事柄の描写や、主人公の登場しない場面（連載の第三十五回）の「語り」は、いったいどのようにして担保されるということになるのだろうか。むろん、それらを明るみに出すためには、寄り添う対象や人物からいったん身を引き剥がし、具体的ないずれに定位するのでもない中立的な視点の確保が必要とされる。それは、外から見る視線とも、あるいはまた「空から見下」す超越的な視点とも言い換えることができるかも知れない。ならば、それをしも「神の視線」と言い切って差し支えないということになるのだろうか。このことを考えるには、さらになお、いくつかの手掛かりを検討してみなければならない。

まず一つ目は、『思い出す事など』の一節。大病で倒れた漱石を、枕もとで看病する人たちがこう形容されている。「余を看護するために、余の視線の届かぬ^{かたわ}傍らを占めた人々の姿は、余に取って神のそれと一般であった」(65)。先述の通り、自由に身じろぎすることさえ叶わなかった病床での切実な実体験から、思わず「神」という言葉が漏れ出た経緯が推測されようというものであろう。そして、もうひとつが、『硝子戸の中』の「全知全能の神」という文言。「私はともすると事実あるのだから、又ないのだから解らない、極めてあやふやな自分の直覚というものを主位に置いて、^{ひと}他を判断したくなる。そうして私の直覚が果して当たったか当らないか、要するに^{かっかん}客観的事実によって、それを確める機会を有たない事が多い。其所にまた私の疑いが終始^{もや}霧のようにかかって、私の心を苦しめている。(改行)もし世の中に全知全能の神があるならば、私はその神の前に^{ひざま}跪ずいて、私に^{ごうはつ}毫髪^{うたがい}の疑^{さしはさ}を挟む余地もない程明らかな直覚を与えて、私をこの^{くもん}苦悶^{げだつ}から解脱せしめん事を祈る。でなければ、この不明な私の前に出て来る^{すべ}凡ての人を、^{れいろ}玲瓏透徹な正直ものに変化して、私とその人との魂がぴたりと合うような幸福を授け給わん事を祈る」(97-98)。

ここでは、ふたつのことに注意しておくべきであろう。一つは、「もし世の中に全知全能の神があるならば」という仮定法で語られていることであり、今ひとつは、自らの直覚や判断をきょくりよく確実なものたらしめたいとする、あくまでも作家としての立場が考慮されているらしい点である。そして、そうし

た系の湊合点に、『道草』中の具体的な表現を位置づけてみることに許されよう。そこではたとえば、創作のなかとはいえ、次のような一節が見出されるのである。

「『彼はこうして老いた』 島田の一生を煎じ詰めたような一句を眼の前に味わった健三は、自分は果してどうして老ゆるのだろうかと考えた。彼は神という言葉が嫌であった。然しその時の彼の心にはたしかに神という言葉が出た。そうして、若しその神が神の眼で自分の一生を通して見たならば、この強欲な老人の一生と大した変りはないかも知れないという気が強くした」(135-136)。

ここでは、地上の人々の生業を、天空から広く俯瞰する「神の眼」が想定されている。それは、作家漱石が、すべての人を一視同仁として捉える地点にまで、かぎりなく近付いていることの証明であると言えるかも知れない⁹⁾。しかしながら、もう一方では、「神という言葉」は嫌いであるともされ、また、ここでも相変わらず仮定法が繰り返されているところを見れば、神を信じる境地には(まだ)明らかな距離があるとしなければなるまい。それがあらぬか、『道草』には、次のような認識もまた書き記されているのである。

「無信心な彼はどうしても、『神には能く解っている』と云う事が出来なかった。もしそういい得たならばどんなに合わせだろうという気さえ起らなかった。彼の道徳は何時でも自己に始まった。そうして自己に終るぎりであった」(160)。

ここでは、知るしめず神の視点と人の世の「道徳」とが、はっきり区別されていることが明白であろう。その際、先ほど挙げた「余の視線の届かぬ傍ら」という記述や、「神でない以上公平は保てない」(273)とする他の箇所での健三の述懐とも併せて考えるなら、神の領域は人知のあずかり知らぬところ、地上における実在のレベルで懸命に生きることこそ人の身の領分だとする二分法がしかと把持されていることが見て取れよう¹⁰⁾。仮にそうであるとするなら、たとえ神の視点にかぎりなく接近するとしても、ただそのことで達観の境地をもわがものにしていないと見なすことはできない。むしろ、神の視線や俯瞰する視点などとはいってみても、それらはあくまで書法上のことであって、実人生の生き方とは自ずから別次元のものと受け取ることが必要であろう。その意味で、ここでは、書くことと生きることが、いわば二元性のもとに見定められているということが出来る。

それにしても、『道草』という思えば不思議なタイトルは、いったいどのようなことを含意しているのだろうか。もとより確証があるわけではないが、考え

られる理由の一つは、作品世界が、主人公の帰朝時点を「語り」の現在とし、もっぱら過ぎ去った過去の出来事を叙述の対象としていることが挙げられよう。したがって、素材としては、一見「停滞」とも「たゆたい」とも受け取られかねない側面を含んでいることは否定できない。その反面、いったんは帰朝時の生活や幼少時の経験にまで遡行し、「滞留」のなかに身を委ねながらも、徹底した自己吟味を敢行することで、新たななにものかを掴み取ろうとしていたとも考えられるとすれば、「道草」はまた同時に、せつせと新生面を切り拓くための巧まぬ準備をも意味することになり、なかなか意味深長な表題であると言える。

また、もう一方、『猫』執筆当時の作者自身の回顧をも念頭に置いていたことを勘案するなら、ひよっとすると、『猫』の叙述法を批判的に反芻していたと考えることもできよう。それというのも、猫の「語り」は、外からの視線を導入することで、なるほど人間世界をアイロニカルに対象化することはできたとしても、動物であるがための限界ゆえに、作中人物相互の関係性の追求にまではとうてい及ぶことができなかった。それがここでは、固定した単一の「語り」から、もう一步語りの視点の重層化へと踏み出すことによって、登場人物相互の対立と相克を、包み隠さず映し出す対位法的な叙法が試みられているのだからである。それゆえに、『道草』という小説では、少なくとも書法の面において明らかに新機軸が打ち出されようとしているのであって、この点においてもまた、表題の両義的な所以のものを想像してみることが許されよう。

反抗し抗弁する女御住のヒステリーと「自然」の反転力

対他者関係に焦点を置いて展開する『道草』において、描写の白眉はいうまでもなく、日々もっとも長く顔を突き合わせる細君と健三との間柄についてである。じじつ「二人は互に徹底するまで話し合う事のついに出来ない男女のような気がした」(60)とされるように、妻御住は、漱石のそれまでのどの作品にも増して、自己の主義主張を譲らない手強い女性として設定されている¹¹⁾。おまけに、二人は、互いの生い立ちや性格の違いから、容易に一致点を見出すことのできない夫婦ともされているので、彼らが衝突する場面には事欠かないが、もっとも精彩を放っていると考えられるのは、たとえば次のような叙述である。

「案に相違して健三は頑強^{がんきょう}であった。同時に細君の膠着力^{こうちゃくりよく}も固かった。二人

は二人同志で軽蔑^{けいべつ}し合った。自分の父を何かにつけて標準に置きたがる細君は、動^{やや}ともすると心の中で夫に反抗した。健三は又自分を認めない細君^{いまいま}を忌々しく感じた。一刻な彼は遠慮なく彼女を眼下^{みくだ}に見下す態度を^{おおや}公^{はばか}けにして憚^{はばか}らなかった。『じゃ貴方が教えて下されば好いのに。そんなに他^{ひと}を馬鹿にばかりなさらないで。』『御前の方に教えて貰おうという気がないからさ。自分はもうこれで一人前だという腹^{おれ}があっちゃ、己^{おれ}にやどうする事も出来ないよ』誰が盲従するものかという気が細君の胸にあると同時に、到底啓発しようがないではないかという弁解が夫の心に潜^{しか}んでいた。二人の間に繰り返されるこうした言葉争いは古いものであった。然し古いだけで埒^{らち}は一向開かなかった」(237)。

健三が「頑強」なのはもとより否定すべくもないにしても、御住もまた決して黙して「盲従する」ような妻ではない。かえって逆に、あくまで反抗し抗弁することを止めない女なのである。とはいえ、そうした二人の関係も、必ずしも毎日が大荒れの土砂降りばかりとは限らない。「護謨紐^{ゴムひも}のように弾力性のある二人の間柄^{あいだがら}には、時により日によって多少の伸縮^{のびぢみ}があった。非常に緊張して何時切れるか分らない程^{ゆつま}に行き詰まったかと思うと、それがまた自然の勢で徐々^{そろそろ}元へ戻って来た」(183)。このような場合には、当然のことながら、健三の胸にもまた穏やかな想いが萌^ゆしてこないわけではない。たとえば、健三が風邪で寝込んだ時の描写はこうなっている。「魔に襲われたような気分が二三日つづいた。健三の頭にはその間の記憶というものが殆^{ほと}んどない位であった。正気に帰った時、彼は平気な顔をして天井を見た。それから枕元に坐っている細君を見た。そうして急にその細君の世話になったのだという事を思い出した。然し彼は何にも云わずに又顔を背けてしまった。それで細君の胸には夫の心持が少しも映らなかった」(29)。

ここには、もしかすると、先にも触れた大患後の作者自身の心境がひそかに反映していたのではないかと思われる。あるいはまた、次のような場面にも、自己批評的な健三の心の内は明らかであると言っていい。「『まあ御瘦^{おや}せなすった事』久し振に彼女を訪問した親族のある女は、近頃の彼女の顔を見て驚ろいたように、こんな評を加えた事があった。その時健三は何故^{なぜ}だかこの細君を瘦^{すべ}せさせた凡ての原因が自分一人にあるような心持がした」(85)。

このような小春日和の日々とても、しかし、夫婦の間では、決して長続きするというような種類のものではない。「機嫌^{きげん}の直った時細君は又健三に向った。『そう頭からがみがみ云わないで、もっと解るように云って聞かして下さった

ら好いでしょう』 『解るように云おうとすれば、理窟ばかり捏ね返すっていうじゃないか』 『だからもっと解り易い様に。私に解らないような小むずかしい理窟は已めにして』 『それじゃどうしたって説明しようがない。数字を使わずに算術を遣れと注文するのと同じ事だ』 『だって貴方の理窟は、他を捻じ伏せるために用いられるとより外に考えようのない事があるんですもの』 『御前の頭が悪いからそう思うんだ』 『私の頭も悪いかも知りませんが、中味のない空っぽの理窟で捻じ伏せられるのは嫌ですよ』 二人は又同じ輪の上をぐるぐる廻り始めた」(261-262)。

売り言葉に買い言葉とは、まさにこういうことをいうのではなからうか。だとしたら、そのような応酬が「同じ輪の上をぐるぐる」と堂々巡りに巡らざるを得ないことは、あまりにも理の当然としなくてはなるまい。とはいえ、ここでも着目しておくべきは、二人の関係を単にスタティックな構造のうちに捉えて満足するのではなく、たえず視点の移動を図りながらどこまでも継起的にフォローすることによって、あくまでダイナミックな動態として描き出そうとする作者の志向が窺われるという点であろう。そして、そのことは、進退窮まった御住の臨界で生起する、思わぬ突発的事態についても指摘することができる。

ここでいう突発的事態とは、「貴方がそう邪慳になさると、また歇斯的里を起しますよ」(151)という御住の予言通りに生起するものに他ならない。細君の発作に逢着した健三は、むろんのこと、不安に駆られ、うろたえもする。ある時などは、心配のあまり、大学での講義が上の空になったりもしているほどなのだ。ところが、面白いことに、まったく同じ事態が、単に厄介なものというだけでなく、正負両面を併せ持つ両義的な意味を湛えたものとして捉えられているのである。たとえば、このような表現はどうだろう。「細君の病気には熟睡が一番の薬であった。長時間彼女の傍らに坐って、心配そうにその顔を見詰めている健三に何よりも有難いその眠りが、静かに彼女の瞼の上に落ちた時、彼は天から降る甘露をまのあたり見るような気が常にした」(144)。細君がヒステリーの発作を起こしたあと眠りに就くことが「天から降る甘露」と形容されているのは興味深いが、ほとんど同様のことが、また、次のような描写のなかにも見出される。

「幸にして自然は緩和剤としての歇斯的里を細君に与えた。発作は都合よく二人の関係が緊張した間際に起った」(219)。「こういう不愉快な場面の後には大抵仲裁者としての自然が二人の間に這入って来た。二人は何時となく普通

夫婦の利くような口を利き出した」(154)。ここでは、「自然」という言葉が、キーワードのような位置を占めている。それは、単に「緩和剤」や「仲裁者としての」役割を果たすというにとどまらない。単にそうしたことだけではなくて、互いに巧く意思疎通を図れない夫婦の関係がまさに臨界点に達したとき、むしろ反転力として作動する「自然」の治癒力をも暗示しているものと受け取ることができる。

「自然」というのは、したがって、喘息の持病に悶え苦しむ姉が激しい咳のために、「三日も四日も不眠絶食の姿で衰えて行ったあと、又活作用の弾力で、じりじり元へ戻るのを、年来の習慣としていた」(69)と語られるのと同じように、仮にいくばくかの生命エネルギーが身内に残っている限り、内発的なその「弾力」が自らを衝き動かしてくれようことへの厚い信頼の表明というべきもので、漱石自身に即していえば、大病からの快癒の経験ともまた大きく響き合っていたものと考えられよう。しかもそこには、「憐憫」と「不憫の念」までが相伴ってもいるのである。

「『おい、己だよ。分るかい』 こういう場合に彼の何時でも用いる陳腐で簡略でしかもぞんざいなこの言葉のうちには、他に知れないで自分にばかり解っている憐憫と苦痛と悲哀があった。それから跪まずいて天に禱る時の誠と願もあった」(140-141)。

「枕辺に坐って彼女の顔を見詰めている健三の眼には何時でも不安が閃めいた。時としては不憫の念が凡てに打ち勝った。彼は能く気の毒な細君の乱れかかった髪に櫛を入れて遣った。汗ばんだ額を濡れ手拭で拭いて遣った。たまには気を確にするために、顔へ霧を吹き掛けたり、口移しに水を飲ませたりした」(219-220)。

その結果、「細君の発作は健三に取っての大きい不安であった。然し大抵の場合にはその不安の上に、より大きい慈愛の雲が靉靆していた。彼は心配よりも可哀想になった。弱い憐れなものの前に頭を下げ、出来得る限り機嫌を取った。細君も嬉しそうな顔をした。(改行)だから発作に故意だろうという疑の掛からない以上、また余りに肝癢が強過ぎて、どうしても勝手にしろという気にならない以上、最後にその度数が自然の同情を妨げて、何でそう己を苦しめるのかという不平が高まらない以上、細君の病気は二人の仲を和らげる方法として、健三に必要であった」(220-221)とさえ語られるのである。

かくして、夫婦二人は、とりあえずの修羅場をひとまずは回避することがで

きた。では、それは、果して本当の「解決」といえるものなのかどうか。これこそが、『道草』論の最後に問われるべき問題である。

「片付くものなんてない」 大団円の不在と読者への開かれたかたち

ところで、『道草』の作品世界は、養父島田の出現によって幕を開けたものであった。彼は、昔の交誼を取り戻したいとの口実を盾に、何やかやと健三に付き纏ってはその度毎に無心を重ねた。それでも埒が開かないとみるや、遂に代理人を寄越して古証文の「書付」を買い取るようにと要求するにも至るのだ。ここにいう「書付」とは、とっくの昔に反故同然となっているものに過ぎないのだが、実は、次のような事情のもとに生まれ出たものであった。「健三はその書付を^{たしか}慥に覚えていた。彼が実家へ復籍する事になった時、島田は当人の彼から^{いっさつ}一札入れて^{もら}貰いたいと主張したので、健三の父も^い已を得ず、何でも好いから書いて遣れと彼に注意した。何も書く材料のない彼は仕方なしに筆を執った。そうして今度離縁になったに就いては、^{こうこおたがい}向後御互に不義理不人情な事はしたくないものだという意味を^{わずか}僅^{あまり}二行余に^{つづ}綴って先方へ渡した」(270)。ここでは、特に「不義理不人情な事はしたくないもの」という文言に眼を留めておきたい。それというのも、この言葉は、当の健三にとって単なる外交辞令以上の意味を持っているように思われるからである。

なるほど、どうあっても生老病死から逃れられない人間は、金銭やら欲得づくやらが緋い交ぜとなり互いに錯綜する対人関係のなかで生活することを強いられる。その結果、情愛もまた限りなく薄いものとなり、ともすれば払底してしまわざるを得ない。しかるに、そうした物心両面において逼迫した生活のなかでも、良きにつけ悪しきにつけ、ひとの感情は「生きて今でも^{どこ}何処かで働いているんだ。己が殺しても天が復活させるから何にもならない」(286)のだと、健三は断言する。ここでもまた「天」が顔を出しているのは注目されるが、そういえば、もう一方で「自然の衝動」(44)やら「^{じょうあい}恩義相応の情合」(44)といった表現も、この作品では決して珍しいものでないことを確認しておきたい。では、これらは、いったいどのように繋がっているといえるのだろうか。

こうした文脈で想定されるのは、漱石の思念のなかに、どうやら「大きな自然」と「小さな自然」とを対比的に捉える思いがあったろうことである。先にも引いた「天から降る甘露」や、いまわの際からの生還を可能ならしめた「天の配剤」がさしずめ前者の典型であるとすれば、与えられた^{いのち}生命をどう生きる

かは、あくまでひとりひとりの生の営みの範囲ということになる。そして、それをしも「小さな自然」と呼ぶとすれば、そのなかにはむろん個々人の意思や感情、さらにはこの世をどのように生きるかの「道徳」もまた含まれよう。おそらくは、そのような思いを踏まえた上で、健三は、島田の代理人にこう告げているのである。「書付を買えの、今に迷惑するのが厭なら金を出せと云われると此方でも断るより外に仕方ありませんが、困るからどうかして貰いたい、その代り向後一切無心がましい事は云って来ないと保証するなら、昔の情義上少しの工面はして上げて構いません」(271)。

結局のところ、健三は、とかくの紆余曲折があつての後、「手切れ金」のようにして百円の金子を渡すことを約束する。そのことを話題にした妻御住との対話のなかで、「遣らないでも可いだけれども、己は遣るんだ」(278)という自らの意志が強調されている点は重要であろう。それはまた、「比田と兄の会話は少しの感銘も健三に与えなかった。彼には遣らないでもいい百円を好意的に遣ったのだという気ばかり強く起った。面倒を避けるために金の力を藉りたとはどうしても思えなかった(290)というフレーズのなかでも反復されているが、健三は、ここで、理屈が立つか立たないかとはまったく別に、ひたすら自らの「好意」や「情義」にしたがって身を処そうとしているのだ。そして、それこそは、「世知辛い」世の中にあつてさえ、なお情愛を枯らさずに生きるとはいったいどうすることなのかを問うた上での「決断」なのだと言ひ換えることもできる。

では、問題は、これにて一件落着ということになるのだろうか。それはそれで、必ずしも、はや明快にして単純ということにはならない。なぜなら、健三のうちには、そうしてまた、作者自身にも、地上のことはなべて「継続中」であると強固な人生観が潜んでいるからである。

漱石は、すでに『硝子戸の中』でこう書いていた。「継続中のものは恐らく私の病気ばかりではないだろう。私の説明を聞いて、笑談だと思つて笑う人、解らないで黙っている人、同情の念に駆られて気の毒らしい顔をする人、凡てこれ等の人の心の奥には、私の知らない、又自分達さえ気の付かない、継続中のものがいくらかでも潜んでいるのではなからうか。(改行)所詮我々は自分で夢の間に製造した爆裂弾を、思い思いに抱きながら、一人残らず、死という遠い所へ、談笑しつつ歩いて行くのではなからうか。唯どんなものを抱いているのか、他も知らず自分も知らないので、仕合せなんだらう」(88-89)。ここには、

自らの病気を筆頭として、なにごとによらずすべからく生きている限りは「継続中」とみなす認識が語られている。そのことはまた、忘れ去っていたはずの「過去」がいつ何時現在になだれ込んでくるかも解らないのと同様、人間関係に付き纏う「宿命」とでも呼ぶべきものであろう。それゆえに、「彼はまだ自分の姉と兄と、それから島田の事も一所に纏めて考えなければならなかった。凡てが頹廢の影であり凋落の色であるうちに、血と肉と歴史とで結び付けられた自分をも併せて考えなければならなかった」(67)と述懐しないわけにはいかないのだ。そして、そうした「継続中のもの」(88)は、実のところ、日常世界の万般にわたって支配しているものに他ならない。

「彼の心のうちには死なない細君と、丈夫な赤ん坊の外に、免職になろうとしてならずにいる兄の事があった。喘息で斃れようとして未だ斃れずにいる姉の事があった。新らしい位地が手に入るようでまだ手に入らない細君の父の事があった。その他島田の事も御常の事もあった。そうして自分とこれ等の人々との関係が皆なまだ片付かずにいるという事もあった」(233)。ここには、「人間の運命は中々片付かないもんだ」(232)とか「何時まで経ったって片付きゃしない」(266)といった、作品の各所で洩らされる健三の心境が、いわばエッセンスとして呈示されている。まさに持病の全快がほとんど見込めないのと同じように、人の世の葛藤や対立も、容易に解決に導かれるものではない。そうであれば、いったんは平穩を取り戻したかに見えた御住の「ヒステリー」も、いずれまた、確実にぶり返してくることが予測されるというものであろう。

このように見てくれば、『道草』には、取り立てて目覚しいドラマの展開があるわけでも、ましてやカタルシスをもたらす大団円が待っているというのでもない。ドラマは、いわば日常生活の端々に埋め込まれているのであって、この作品の眼目は、むしろ徹底した相対化の眼差しの下、幾重もの齟齬や葛藤を抱えつつもかろうじて保持される日常生活の全体相を、きょくりょくありのままに描出しようとするところにこそあると言える。それゆえに、その「語り」は、一面では俯瞰する視点からのものとはいえ、たとえ見そなわしはしても、あくまで人事に介入したりはしないという域にとどまっており、「全知全能の神」であればあるいは可能であったかも知れない統整的結論を、あえて導き出そうとするような性格のものではない。その点において、ここでの「語り」と人の世の生き方との関係を、先に挙げた「大きな自然」と「小さな自然」との対比に重ね合わせることもできよう。前者は、たしかに「則天去私」の境地とも、あ

るいはまた指呼の間にあったとも見られようが、異質なものは異質なままに、相対的生の実相をそっくりそのまま包み込もうとするような「語り」の構図は、作品内での完結を放棄したともいえるもので、その意味で『道草』は、もはや「近代小説」の枠組みを逸脱しようとしていたと見なすことさえ不可能ではない。

あらためて振り返ってみるなら、近代社会は、ほぼおしなべて自我と自我との角逐であり、我執こそ近代人特有の宿痼とでも呼ぶべき位置を占めるに至っていた。その克服は、もとよりなまかなことで叶うものではない。そうであれば、我執を乗り越え、近代のもう一つ先を遠望しようとするための第一歩は、少なくともその実態を明るみに出すところから始められる他はない。この点にこそ、『道草』が、ことさらドラマの展開を追おうとするのではなく、対位法的叙法を心掛けていることの根拠のひとつが見出せよう。もう一点、このこととの関連で思い出されるのは、『道草』の執筆にほぼ半年ほど先だっで行なわれた有名な講演「私の個人主義」(大正3年)のなかの次のような一節である。

「近頃自我とか自覚とか唱えていくら自分の勝手な真似をしても構わないという符徴に使うようですが、その中には甚だ怪しいのが沢山あります。彼らは自分の自我をあくまで尊重するような事をいいながら、他人の自我に至っては毫も認めていないのです。いやしくも公平の眼を具し正義の観念を有つ以上は、自分の幸福のために自分の個性を発展して行くと同時に、その自由を他にも与えなければ済まん事だと私は信じて疑わないのです。我々は他が自己の幸福のために、己れの個性を勝手に発展するのを、相当の理由なくして妨害してはならないのであります(「私の個人主義」『漱石文明論集』所収、岩波文庫、123-124)。

あわよくば「金力」のみならず、また「権力」をも自らの縦にしかねない学習院の生徒たちに授けた漱石の言葉は、かくまでも「倫理的」なものであった。思いがけないことに、とでもいうべきであろうか。いずれにせよ、漱石の唱える「個人主義」は、「我儘な自由」を勝手に主張するような「利己主義」と同じものであってはならなかった。自由には義務が伴うし、また、自分の自由を主張したいなら、同時に、他人の自由をも認めなければならない、すなわち、「他の存在を尊重すると同時に自分の存在を尊重するというのが私の解釈」だというのが、あくまで漱石の主旨とするところなのである。それにしても、こうした「解釈」が、はたして「世知辛い」世の中に生きる若者たち大方の賛同を得られることになるものなのかどうか、おそらくは漱石自身、確信を持って

いたとは思われない。だが、それにもかかわらず、「自己の道徳」を持して生きようと決意すること、実は、そこにこそこの当時の漱石の、並々ならぬ人生観があったのだと考えられる。

「遣らないでも可^いいのだけれども、己^{おれ}は遣るんだ」という健三の島田に対する対処法も、したがって、このような文脈に置き直してみると、あるいはいくぶん理解が容易に進むものと言えるのではあるまいか。なぜなら、ここにもまた、「それにもかかわらず」という反転の論理が、明らかに垣間見えているのだからである。しかし、そのことが万人を納得させうるような解決に繋がるとは、当の健三自身、信じてはいない。いや、むしろ、そもそもそういうものを求めないところにこそ、新たな文学の方途を見届けておくべきかも知れない。

このように、『道草』には、真の解決と呼べるような大団円が見つからない。人が生き続けている限り、継続中のものは単に姿を変えるだけで、いつでもまた蒸し返されてくるからである。まさに「片付くものなんてない」ということなのであろう。してみれば、いかなる問題であれ、それが難問であればあるほど、作品世界の内部で完結するということにはなりえない。ならば、その最終的な受けとめ方は、いわば個々の読者に委ねられているとも言えるわけで、その結果、作品の結末は、とどのつまり読み手の参加を促すようにして読者へと開かれたかたちを示すのである（そしてそのなかには、むろんのこと、未来の読者もまた含まれる）。おそらくはこのことを反映し、『道草』のラストシーンは、どこまでも執拗に反転し続ける夫婦の遣り取りを描いて、ひときわ鮮やかなものとなっている。

「『まあ良かった。あの人だけはこれで片が付いて』 細君は安心したと云わぬばかりの表情を見せた。『何が片付いたって』 『でも、ああして証文を取って置けば、それで大丈夫でしょう。もう来る事も出来ないし、来たって構い付けなければそれまでじゃありませんか』 『そりゃ今までだって同じ事だよ。そうしようと思えば何時でも出来たんだから』 『だけど、ああして書いたものを此方^{こっち}の手に入れて置くと大変違いますわ』 『安心するかね』 『ええ安心よ。すっかり片付いちゃったんですもの』 『まだ中々片付きゃしないよ』 『どうして』 『片付いたのは上部^{うわべ}だけじゃないか。だから御前は形式張った女だというんだ』 細君の顔には不審と反抗の色が見えた。『じゃどうすれば本当に片付くんです』 『世の中に片付くなんてものは殆んどありゃしない。一遍起った事は何時までも続くのさ。ただ色々な形^{ひと}に変るから他にも自分

にも解らなくなるだけの事さ』 健三の口調は吐き出す様に苦々しかった。細君は黙って赤ん坊を抱き上げた。『おお好い子だ好い子だ。御父さまの仰^{おっし}やる事は何だかちっとも分りゃしないわね』 細君はこう云い云い、幾度か赤い頬^{ほお}に接吻^{せつぶん}した」(291-292)。

されば、当面の顛末をこのように締め括った時、48歳の漱石は、もはや近代文学の大成者としてではなく、自らの死を一年半後に控え、言うならば「現代文学」のトバ口に立っていたのである。

註

- 1) 漱石の長男夏目純一は、「父の横顔」と題する回想文のなかで、仕事を離れ、書画や漢詩に打ち込む父の姿をこう叙述している。「かつて妻に俳句の手ほどきしようとして失望し、肉親にも、また期待をかけた小供らにも報いられなかった父に残されたただ一つの楽しみ、それは仕事のあいまに作る漢詩や、暇を見てはかいた絵だった。事実絵をかいている時の父は何かいつもと違って楽しそうに見え、ピリピリした神経など跡形もなく、おだやかな顔に見えた。そしてそれがいつもうっ積しているもやもやや、内攻したいらいらから父を慰め、やわらげてくれたのではなかろうか。そこには世の中のすべての俗事から開放された平和な表情があった。そういう時の父が今でも、私の記憶の中で一番親しみのある父の顔なのである(夏目漱石『硝子戸の中 他一編』旺文社文庫、168ページ)。
- 2) 夏目漱石は、留学当時すでに、パリ万国博やロンドンでの画廊めぐりの見聞をもとに、アール・ヌーヴォー様式やラファエル前派といった世紀末芸術に一方ならぬ関心を寄せていたが、同種の嗜好はまた、『吾輩は猫である』を嚆矢とする何冊かの自著の装丁にも如実に示されているところであった。そうであれば、その発展形態とも位置づけしうる「西欧モダニズム」の動静に対しても、とうてい無関心であったとは思われない。あらためて思い起こせば、漱石の没年(大正5年)は、西暦年号でいえば1916年に当たっており、したがって彼は、すでに第一次世界大戦の開戦報道にも接していたわけで、世紀末を端緒に西欧の各地に叢生^{そうせい}した1910年代の文学(芸術)運動とも、いわば同時代の空気を呼吸していた現役作家であった点が忘れられてはならない。そして、それらの芸術運動が、いずれも「西欧近代の超克」を標榜していた事実を念頭に置いてみるなら、最後期の漱石文学を、むしろ狭義の「近代文学」を乗り越えようとする系譜の内に捉え直すことによって、「現代文学」とし

での射程とその内実を解明することが、いまだ十分な解決を見ていない重要な研究課題として浮上して来るのではあるまいか。

- 3) 漱石の伊豆滞在中、実は、かねてより主治医の任にあった長与病院長と、病中の無聊ぶりょうを讀書によって慰めてくれたウィリアム・ジェームスが相次いで死去していたのであった。この偶然は、その事実を後日はじめて伝え聞かされた漱石に、彼らと引き替え、わが身の生還という幸運をいっそう強く実感せしめた要因の一つになったものと考えることができる。
- 4) 「好意の干乾びた社会に存在する自分」(79)という認識は、むろん自らが身を置く当時の時代状況に発していた。とりわけ経済事情が青年たちを追い詰めている酷薄さを漱石はこう指摘している。「今の青年は、筆を執っても、口を開いても、身を動かしても、悉く『自我の主張』を根本義にしている。それほど世の中は切り詰められたのである。それほど世の中は今の青年を虐待しているのである。『自我の主張』を正面から承うけたまわれば、小憎こにくらしい申し分が多い。けれども彼らをしてこの『自我の主張』を敢てして憚はばかる所なきまでに押し詰めたものは今の世間である。ことに今の経済事情である。『自我の主張』の裏には、首を縊くくったり身を投げたりすると同程度に悲惨な煩悶はんもんが含まれている」(79)。
- 5) ほとんど同じ両義的な意味のことは、当時の日記の記述にも見出すことができる。
 「重湯・葛湯・水飴の力を借りて仰臥、静かに衰弱の回復を待はまだるこき退屈なり。併せて長閑のどかなる美わしき心なり。年四十にして始めて赤子の心を得たり。この丹精あえを敢てする諸人に謝す」(『漱石日記』、163)。また、ストレスから解放された時の心境はこのように綴られている。「病正まさに軽快に移らんとして、今更病を慕うの情に堪えず。本復の後にはかかる寛容ある、stress なき生涯、自己の好むままの心の働きを尽して朝より夕に至る時間、朝夕余の周囲に奉侍すべして凡て世話と親切を尽す社会の人、知人朋友もしくは余を雇う人のインダルジェンス。これらは悉ことごとく一朝の夢と消え去りて、残るもの鉄の如き堅き世界と、磨き澄まさねばならぬ意志と、戦わねばならぬ社会だけならん。余は一日も今日の幸福すてを棄るを欲せず(174)。
- 6) たとえば、漱石門下のひとりであった寺田寅彦は、「夏目漱石先生の追憶」と題する回想記のなかに、次のような証言を残している。「自分の洋行の留守中に先生は修善寺しゅぜんじであの大患にかかれ、死生の間を彷徨ほうこうされたのであったが、そのときに小宮君からよこしてくれた先生の宿の絵はがきをゲッチンゲンの下宿で受け取ったのであった。帰朝して後に久々で会った先生はなんだか昔の先生とは少しちがった先生のように自分には思われた。つまりなんとなく年を取られたというのでもあろう。か

えるの声のまねをするような先生はもういなかった。昔かいた水彩画の延長と思われる一流の南画のようなものをかいて楽しんでおられた。無遠慮な批評を試みると口を四角にあいて非常に^{にが}苦い顔をされたが、それでも、その批評を受けいれてさらに手を入れられることもあった。先生は一面非常に強情なようでもあったが、また一面には実に素直に人の言う事を受けいれる^{こうこうや}好々爺らしいところもあった。それをいいことにして思上がった失礼な批評などをしたのは済まなかったような気がする」(小宮豊隆編『寺田寅彦随筆集 第三巻』所収、岩波文庫、290 - 291)。師弟関係における漱石晩年の風貌を伝えて、今なお印象深いもののひとつといえよう。

- 7) 興味深いことというべきか、先にも触れた『思い出す事など』のなかに、次のような一節がある。「余は^{やまい}病に^よ因ってこの陳腐な幸福と^{らんじゅく}爛熟な^{くつろぎ}寛裕を得て、初めて洋行から帰って平凡な米の飯に向った時のような心持がした(17)。ひょっとすると、このことが、『道草』を構想する直接の機縁になったという可能性も排除できない。しかし、漱石の実録に照らせば、帰朝時から処女作『吾輩は猫である』を執筆する時点に及ぶおよそ数年間の時間経過が、『道草』では梅雨時から翌年の正月までのわずか七、八ヶ月の出来事として凝縮されており、この点に関して、私的な「particular case」としてではなく、あくまで「general case」を描き尽くそうとする作家の意向を窺うことができる。
- 8) 『道草』の語りには、具体的にはこう記されている。「官僚式に出来上った彼の眼には、健三の態度が最初から^{すこぶ}顔る横着に見えた。超えてはならない^{ぶしつけ}階段を不躰に飛び越すようにも思われた。その上彼は^{むやみ}無暗に自ら任じているらしい健三の高慢ちきな所を喜ばなかった。頭にある事を何でも口外して^{はばか}憚らない健三の無作法も気に入らなかった。乱暴とより外に取りようのない一徹一図な点も非難の^ま標的になった」(204)。
- 9) 健三は、たとえば無学な姉と比較して、自分自身をこう位置づけている。「姉はただ露骨なだけなんだ。教育の皮を^む剥けば己^{おれ}だって大した変りはないんだ」(189)。
- 10) 具体的な比喩を用いて言い換えるなら、あるいはそれは、文楽(人形浄瑠璃)の義太夫語りと個々の人形に体现される作中人物との関係に擬えることができるものかも知れない。前者が作品を織り成す者とすれば、後者はひたすら作品世界のなかを生きる者といった風に、明らかに両者は次元を異にしたものとして捉えられているのである。
- 11) あらためて顧みるなら、それまでの漱石作品のいずれもが、男性主人公の心意についてはよく剔抉されているとはいうものの、その対者ともいべき女性人物につ

いては、なお手薄なままにとどまったとの憾みを残したと言わなくてはなるまい。おそらく、この点にも、『道草』において、女性人物の自己主張がひとときわ前景化されて描かれなければならなかった所以のものを見て取ることができる。